

# 2012 年米国大統領選挙における 社会運動と投票行動

— 世代・所得・エスニシティによるグレイ対ブラウンの分断 —  
Social Movements and Voting Behavior in the 2012 Presidential Election  
— The grey versus brown divide by age, income, and ethnicity —

高橋 善隆

Yoshitaka TAKAHASHI

## 要 旨

2011 年 9 月 17 日から 11 月 15 日にかけて展開されたウォール街占拠運動は、格差社会への異議申し立てを通じて全米各地に影響を及ぼした。彼らは、若者世代を中心としながらも、直接民主主義の新たな形態を模索し、2008 年とは異なり必ずしもオバマ支持を表明したわけではなかった。投票ボイコットや第三政党待望論は、既存の二大政党制が彼らの抱える問題に対し解決策を提起できなかったことの表れとも思える。他方、2010 年中間選挙で共和党躍進の原動力となったティーパーティも予備選段階でストップ・ロムニー運動を展開するなど共和党との一体感はみられなかった。

米国社会におけるこうした社会運動が、従来の民主対共和、保守対リベラルの図式で説明できないのはなぜなのか。

他方、ヒスパニック・ラティーノ系などマイノリティの人口増加と、これに対する草の根保守＝白人中間層高齢者のバックラッシュは「グレイ対ブラウン」と呼ばれる新たな分断をもたらしている。2 つの社会運動や人口構成の変化がもたらす米国政治の変化を 2012 年大統領選との乖離という視点から批判的に検討する。

## はじめに

2012 年の米国大統領選挙は、現職のオバマが再選を果たした。獲得州の数や得票率では接戦であったが、獲得代議員数では 332 対 206 で共和党ロムニー候補に圧勝した。勝因としてはアフリカ系の 93%、ヒスパニック・ラティーノ系の 71% などマイノリティーの支持を固めたことが挙げられる。

また女性の 55%、29 歳以下の若者の 60%、年収 5 万ドル未満の 60%がオバマに投票した。だが果たして若者や低所得者がオバマの実績に共感し、積極的に支持していたのかについては疑問が残る。筆者がシャーロット(民主党大会開催地)で接したウォール街選挙運動の若者たちは、投票ボイコットを呼びかけ、民主党もコーポレート・パーティーに過ぎないと喝破していた。また投票するならグリーンパーティーかコンシューマーパーティーだ、といった第三政党待望論も少なからず見受けられた。消去法で最悪の選択肢を回避するためにやむなくオバマに投票した若者には 4 年前のような高揚や積極的支持はみられなかったというのが、社会的内実であろう。

他方、共和党陣営も 2010 年中間選挙勝利の原動力であったティーパーティーが、予備選挙の段階ではストップ・ロムニー・キャンペーンを展開し、本選でも従来のような過激な選挙キャンペーンは影を潜めた。(スーパーPAC の中傷 CM などは熾烈だったが、草の根保守はロムニーの中道的スタンスに反発し、リバタリアンは終盤まで独自候補擁立さえ模索していた。)

こうした社会運動と選挙キャンペーンの乖離は何を意味しているのだろうか。ウォール街占拠運動の若者は直接民主主義の新たな形態を模索し、自分たちも決定に参加させろ、と意思表示をしている。他方ティーパーティーも既存の共和党との対立や指導層に対する批判を通じて存在感を拡大していった。本論では近年のアメリカ社会に大きな影響をあたえた社会運動の内実と、代議制民主主義との複雑な交錯を検討課題としたい。代議制に対する直接民主主義からの問いかけ、既存の二大政党制に対する第三政党待望論などが噴出する背景には、民主・共和のいずれによっても解決されることの困難な問題を抱えた人々がアメリカ社会に広がりつつある現実があるのではないだろうか。

## 第一章 再び「2つのアメリカ」なのか？

2004 年の民主党大会で無名のシカゴ大学非常勤講師オバマは、「ひとつのアメリカ」と題する基調報告を行い、一躍脚光を浴びた。ブッシュ対ケリーの選挙戦を通じて、保守対リベラル、イラク戦争はか非か、ユニラテラリズムか国際協調か、東部・西海岸対南部・ロッキー山系など、イデオロギー、国際関係、地政学をめぐる様々な分野で全米が 2 つに分断され、熾烈な政治闘争が展開されていた。その中で無名のオバマが発信した白人もアフリカ系もアジア系もない「ひとつのアメリカ」として未曾有の困難に立ち向かっていこうというメッセージは多くの人々から共感を受け、上院議員当選後任期中に大統領へと上り詰めることになる。しかし彼の在任期間中、アメリカは再びホワイトハウスと共和党議会の対立に象徴される二極化の時代に突入したように思われる。

社会運動の文脈でも草の根保守の「ティーパーティー」と、「99%の蜂起・ウォール街占拠運動」では対極的な社会的内実を示している。こうした潮流の考察が第一章の課題である。

## （１）ウォール街占拠運動の展開と全米への広がり

ウォール街占拠運動は、2011 年 9 月 17 日から 11 月 15 日にかけて、リバティ・プラザ(旧ズコッティ・パーク)を中心に展開された直接民主主義運動である。国内的背景としては 1%の富裕層に資産の 24%が集中しているという格差社会の現実、8%を超える失業、学生ローンで大学を卒業した若者に非正規雇用しか見当たらず利子すら払えない非人間的な現実などが指摘できよう。国際的にはチュニジア、エジプトで展開されたジャスミン革命やスペインの若者が蜂起した M15 運動などから多くの示唆を受け、ソーシャル・メディアを活用した新たな運動形態が実現したとされている。<sup>(1)</sup>

具体的経過としては、前史として 2011 年 5 月 12 日から 6 月にかけてブルームバーグNY市長の教職員 4000 人レイオフを盛り込んだ予算案に対し、1000 人を超える教職員やアクティビストが抗議運動を展開し、市庁舎周辺に泊り込むなどの行動が為された。こうした機運の中で 7 月 13 日に、カナダの消費者運動機関誌アドバスターズがネット上で「9 月 17 日にウォール街を占拠せよ」との呼びかけを発信し、8 月 2 日に準備会合が開かれることになった。準備会合ではワーカーズ・ワールド・パーティなどの左翼党派が旧態然たる指導者の演説と統制されたデモを主張したが、アナーキストや運動未経験の若者たちがこれに反発し、勝手に上下関係のない水平的なゼネラル・アセンブリーを開いてその後の流れを決定づけたとされている。そして 9 月 17 日には当初予定していたチェースマンハッタン広場が閉鎖されていたため、ズコッティパークの占拠が敢行された。<sup>(2)</sup>

9 月 28 日、NY市の地下鉄・バス組合が支援を決定すると、10 月からはテント村の定着、ブルックリン橋でデモ隊 700 人の逮捕など全米や世界から注目される事件が続発した。10 月 5 日にはNY市の主要組合や地域の社会運動が賛同し、1 万 5000 人と最大規模のデモが展開された。こうした潮流を受けて 10 月 16 日にはオバマが支持表明、11 月 2 日にはサンフランシスコのオークランドでゼネストが展開されるなど運動は全米に広がった。

11 月 15 日、NY市警は急遽テント村を撤去し、人々を強制排除するなどの行動に出たが、11 月 17 日には 1 万人のデモでこれに応えるなど活動は止まず、他の占拠場所を模索するなどの動きが続いている。またNYの影響を受けた全米各地で同様の占拠運動が継続している。

ウォール街占拠運動の特徴は直接民主主義的な運営方法と、直接行動に関する思想にある。ゼネラル・アセンブリーと呼ばれる総会は毎週火木土日の夜 7 時から 9 時半までリバティプラザ(旧ズコッティパーク)で開催され、誰でも参加できる水平的な会議運営を実現している。占拠された公共空間で 50 を越すワーキング・グループが雇用、負債、マイノリティの課題など各論を提起し、全員がジェスチャーで賛否を示す。また拡声器は使用せず、人間マイクとして「マイクチェック」の掛け声で会議に活力を与え、円滑な議事進行を展開する。

さらに個別の討論の場としてはスペイン人民戦線からヒントを得た「スポーク・カウンスル」が毎週月水金の夜に開催されており、交互に持ち回りで勤めるファシリテーターを中心に、いかなる参加

者にも優劣のない水平的な議論の場が確保されている。<sup>(3)</sup>

「戦術的多様性」か「非暴力」かという争点では激しい論争がなされたものの、「非暴力・市民的不服従」のコンセンサスが形成されている。

“Occupy Wall Street” “We are the 99%” というスローガンは強烈な印象を与え説得力にあふれている。問題の所在を世に問う手段としては稀有な成功例といえるだろう。しかしゼネラルアセンブリーの決議によって学生ローンの負債が帳消しになるわけでもなく問題解決の手段を模索する試みとの連携が不可欠となるだろう。

また他に比べて桁外れに潤沢なウォール街占拠運動の資金を、他地域の運動といかに分かち合うか、など様々な課題も残されている。

## （２）草の根保守ティーパーティーの活動とティーパーティー議員連盟

2010年の中間選挙で、共和党は242議席を獲得し下院の多数を奪還した。共和党躍進の原動力となったのが草の根保守ティーパーティー運動である。<sup>(4)</sup>

ティーパーティーの起源は、2007年12月にボストンティーパーティー234周年を記念してロン・ポールが主催した「ティーパーティー集中献金」とされる。彼は1978年にテキサス州選出下院議員に当選したが、党を離脱し1988年にはリバタリアン党から大統領選に出馬するなどの経歴を持つ。1996年に共和党下院議員として復活を果たした後も主流派批判を展開していた。ブッシュ政権に対してはイラク戦争への反対を表明し、4500億ドルに及ぶ財政赤字への懸念からリバタリアニズムを展開している。さらに各州の活動家が税や財政赤字への抗議行動を活性化させる中で転換点となったのが、2009年2月19日である。CNBCの株式解説者であるリック・サンテリは、住宅ローンの債務者を救済するためオバマ政権が2750億ドルの支出を法案化したことに激怒し、「負け犬の借金をなぜ税で肩代わりしなければならないのか」とシカゴ・ティーパーティーの開催を呼びかけた。こうした文脈の中で草の根保守は活性化し、2009年9月12日にはワシントンDCで大規模なオバマ批判の集会が開催され、多くの組織が連携を強化するようになった。<sup>(5)</sup>

主要な全国組織としては①フリーダムワークス、②ティーパーティー・エクスプレス、③1776、④レジストネット、⑤ティーパーティー・ネーション、⑥ティーパーティー・パトリオッツなどがある。フリーダムワークス、ティーパーティー・エクスプレスは共和党幹部とも強い結びつきがあり、草の根ではなく人工芝と揶揄されている。「フリーダムワークス」は元下院院内総務のディック・アーミーを代表に1万5044人を擁しており、税や財政赤字などの争点を重視し、反移民などの社会的争点には消極的である。「ティーパーティー・エクスプレス」は共和党候補を支援する政治献金活動およびバスツアーによる政治宣伝を主たる活動としており、地方組織はない。創設者のマーク・ウィリアムスはオバマを「生活保護詐欺を行ったインドネシア人イスラム教徒」と攻撃するなど過激な言動で知られる。

2010 年 1 月 20 日にはエドワード・ケネディ没後のマサチューセッツ上院補選で無名のスコット・ブラウンを支援し 34 万 8000 ドルを献金するなど勝利に貢献した。

これとは対照的に他の 4 組織は社会的争点を重視し反移民などの立場を鮮明にしている。「1776」は元海兵隊のデール・ロバートソンを代表とし移民排斥の自警団「ミニットマンプロジェクト」などとのつながりが指摘されている。「レジストネット」はスティーブ・エリオットの運営する営利事業でアリゾナ州知事ジャン・ブリュワーが推進する反移民法案 SB1070 を強力に支持している。また「ティーパーティー・ネーション」はナッシュビルで弁護士を営むフィリップス夫妻により組織され、反同性愛、反移民などの社会的争点を重視しフリーダムワークスと激しい路線対立を顕在化させている。さらに 11 万 5311 人の会員を擁する全国最大組織「ティーパーティー・パトリオッツ」は「建国の父祖たち」への敬意とともに、過度に私有財産制を重視する政治信条を持ち、連邦の所得税徴収権を定めた修正第 16 条の廃止を求めている。<sup>(6)</sup>

ティーパーティーはオバマ批判のみならず、本来の保守から逸脱し歳出拡大を続けたブッシュ政権や共和党執行部への批判を繰り返し、影響力を拡大してきた。ミシェル・バックマンを代表として 2010 年に結成されたティーパーティー議員連盟は、発足当初の 51 名から 60 名へと所属議員を増やし、憲法擁護・小さな政府・財政赤字削減などを掲げている。もとより修正第 16 条廃止のようなプロパガンダは非現実的だが、フリーダムワークスのマニフェストに依拠した 10 項目のアジェンダが議会で審議され、温室効果ガスの排出権取引拒否やオバマケアの廃止などは下院で可決され上院で否決されるなど、実態を伴わないものの議会の両極化・機能不全に大きな影響を与えている。

2012 年の大統領選挙では、当初ミシェル・バックマン代表自身が立候補し、次の局面では貧困家庭から起業し成功した黒人実業家ハーマン・ケイン氏を支持するなど錯綜したが、やがて「ロムニー氏以外なら誰でもよい」とするストップロムニー運動を展開し混乱を極めた。ロムニーが候補者指名を受託したのちも前回の中間選挙でみられたような熱烈な選挙キャンペーンが大統領選で展開されることはなかった。

### (3) ティーパーティーと労働運動の交錯：ウィスコンシン争議の内実

2010 年 11 月の中間選挙で、それまで民主党が知事と議会の多数派を握っていたウィスコンシン州は、ティーパーティーの支持するスコット・ウォーカー知事と共和党多数議会に州政を譲り渡すことになった。ウォーカー知事が就任一ヵ月後に提案した財政改革法はその内容があまりに反組合的な官公労潰しの法律だったためウィスコンシンでは全米を揺るがす大争議が勃発することになった。<sup>(7)</sup>

ティーパーティーの内実はスコッチボルやウィリアムソンが指摘するように、狭義の草の根保守アクティビストにとどまることなく、保守系メディアのイデオログや、資産家に資金援助を受けたアドボカシー・グループ (billionaire-backed freemarket advocacy group) の複合体を形成している。

コーク兄弟らコーポレートリッチの援助を受けたグループは公共部門のムダや不正を監視するよりも官公労そのものを標的とした政治闘争を展開しているのである。<sup>(8)</sup>

ウォーカー知事の財政改革法は①非組合員が組合費相当分を組合に支払うエージェンシーフィーの廃止、②組合費のチェックオフ(直接徴収)廃止、③団体交渉は賃金問題に限定し、インフレ率を上回る賃上げには州民投票を必要とする、④毎年、組合の再認証を義務づけ、投票総数の 51%ではなく、組合が代表する労働者の有権者総数 51%以上を認証基準とする、⑤選挙でウォーカーを支持した警察や消防士はこの法案から除外される、などの内容を含んでいた。

民間労働組合の組織率が 6・9%と低迷する状況下で、官公労が 36・2%の組織率を維持し 762 万人の組合員を擁していることが、共和党保守派やティーパーティーには脅威と映り、民主党の堅固な支持基盤でもある官公労の攻撃が開始されたのである。<sup>(9)</sup>

2 月 11 日に提案された財政改革法に対し、州民たちは公聴会を通じて採決の引き延ばしを図ることにした。ウィスコンシン州民は議会にかけられた法案に対し、合同財務委員会で賛否の意見を 2 分以内で述べる権利があり、発言の順番を待つ州民がいる間は法案を採決にかけるとはできない。深夜に発言順が回ってくることを予想し、議事堂に泊り込む組合員が現れる一方で、共和党スタッフが聴聞を打ち切る意向を示したため、「発言させるまではここを動かさない」という議事堂占拠が開始された。

2 月 15 日には両院の公聴会で 17 時間にわたり法案への抗議が行われ、翌 16 日には州議事堂に 3 万人が結集すると同時に、教員組合の職場放棄によって公立学校が休校となった。17 日には州議会上院の民主党議員が採決を阻止するため州外へ退去するなど抗議の動きは過激になり、19 日には 7 万人、26 日には 10 万人が議事堂前の集会に参加した。3 月 3 日に裁判所が州議事堂への泊り込みを禁止する法令を出すまで 17 日間にわたってウィスコンシン州議会占拠は継続されたのである。

法案は 3 月 9 日に民主党欠席のもと上院では 18 対 1 で可決され、翌 10 日にも 53 対 42 で下院を通過し成立してしまった。他方 11 月 15 日にはウォーカー知事へのボイコット運動が開始され、100 万人を超えるリコールの署名が 2012 年 1 月 17 日までに集められた。(選管発表の有効数は 92 万人)最終的に 6 月 5 日の再選挙でスコット・ウォーカーは 133 万票対 116 万票で再選されてしまうが、官公労と州民の連帯、17 日にわたる議事堂占拠の成功などは全米を強烈な印象を与え、その後のウォール街選挙運動にも大きな影響を及ぼすことになった。

## 第二章 サプライズなき 2012 年大統領選挙とその背景

2012 年の大統領選挙は現職のオバマが再選を果たした。事前の接戦という予想に反し、獲得代議員数では 332 対 206 の圧勝を収めた。2008 年のような期待や追い風はなく、フロリダ 29、オハイオ

18 など接戦州の 89 議席を獲得する選挙戦術が大きな勝因だったといえるだろう。またアフリカ系の 93%、ヒスパニック・ラティーノ系の 71% などマイノリティの票を固め、女性の 55%、29 歳以下の若者の 60%、年収 5 万ドル未満の 60% から支持を得たことも大きな勝因となった。草の根保守のアクティビストが、白人中産階級の高齢者に多いことから、こうした動向は世代・所得・エスニシティにより分断された「グレイ対ブラウンの対立軸」(スコッチボールド&ウィリアムソン)とも呼ばれる。第二章ではこうした対立軸の内実、人口構成の変容、接戦州の動向について検討する。<sup>(10)</sup>

### (1) グレイ対ブラウンの対立軸？

2010 年の米国国勢調査でヒスパニック・ラティーノ系人口は 5047 万 7594 人とされ、全米 3 億 874 万 5538 人の 16・3% を占めるに至っている。前回 2000 年の調査と比較して総人口の伸び率が 9・7% であるのに対し、ヒスパニック・ラティーノ系の人口増加は 43% と飛躍的高まりをみせている。選挙権を持つヒスパニック・ラティーノ系人口も、2400 万人を占め有権者の 10% に及ぶ。ニューヨークでは 817 万 513 人の総人口中 233 万 6070 人を占め、ロサンゼルスでも 379 万 2621 人中 183 万 8822 人とそのシェアは全体の 49% に至っている。二期連続してロサンゼルス市長を務めているビュアゴッサ氏は民主党大会でも議長に任命された。2060 年にはアフリカ系、アジア系も含めエスニック・マイノリティが全米のマジョリティになるとの予測もなされている。

こうした人口構成の変化に対し、草の根保守はホワイトバックラッシュともいえる反発をみせており、移民排斥の自警団を背景とする「1776」やアリゾナ州知事ジャン・ブリューワーの反移民法 SB1070 を推進する「レジストネット」などは過激な反移民の姿勢を示している。「ティーパーティー・パトリオッツ」などの多数派において社会的保守を掲げるグループは反移民を鮮明にしている。<sup>(11)</sup>

スコッチボールド&ウィリアムソンはティーパーティが抱えるパラドックスを 2 つの視点から論じているが、これらは彼らの移民に対する態度とも深く関係している。第一のパラドックスはデモクラシーとティーパーティの関係である。彼らはシヴィック・エンゲージメントのお手本のような参加型の活動を展開しており、集会では報告者のスピーチに積極的な質問がなされ、ソーシャル・メディアを通じた情報交換や友好関係が広がっている。また、連邦政府・地方政府の法制化手続きや、どの議員がいつ自分たちの法案に賛成し、反対したかに精通している。しかし彼らの政策に関する知識は驚くほど不正確で、フォックステレビが報道するプロパガンダや、コーク兄弟などのコーポレートリッチが支援するアドボカシー・グループの見解をほとんど鵜呑みにしている。移民や低所得層むけの社会福祉プログラムは税金のムダ使いであり、職のない若者への職業訓練プログラムも削減すべしということになる。参加型の草の根運動が反移民・反低所得者・反若者の方向に動員され、アドボカシー型のデモクラシーが公共部門のムダや不正を批判するという装いで様々な社会福祉プログラムの削減・廃止に利用されている。下院で展開されたライアン予算案などはその典型とされる。<sup>(12)</sup>

ティーパーティーの抱える第二のパラドックスは、グループ内部での驚くほど親密な友好関係と外部の人々に対するステレオタイプ化、憎悪に満ちた拒絶である。「建国の父祖への郷愁」や友人たちとの絆の対極には、潜在的犯罪者である有色人種や移民たち、税金にたかる官公労や公立学校の教職員、共産主義者の SEIU、国家に対する脅威であるアフリカ系やヒスパニック・ラティーノ系の組織化、など保守系メディアやシンクタンクに刷り込まれた偏見がある。敵対者を利する予算の削減が政治目標に設定されることになる。彼らは白人・中間層・高齢者などの社会的属性を共有しているため「グレイ」とされ、彼らの標的とされるマイノリティや若者たちが「ブラウン」と表現される。若者世代は多様な人種的背景を持ち経済的にも裕福でないことから社会的プログラムに支援されることが多く、これがコーポレートリッチの支援するアドボカシー団体や保守系メディアの刷り込みにより、草の根保守の攻撃対象とされている構図である。<sup>(13)</sup>

しかし 18 世紀の社会と異なり今日のアメリカ社会はアフリカ系やヒスパニック・ラティーノ系の人々が担う様々な職種が存在しなければ機能せず、また「グレイ」世代の孫たちが享受するであろうはずの社会サービスを失うことでコミュニティにも弊害が及ぶことになる。コーポレートリッチや保守系メディアの政治的利益のみが実現する結果を招くだろう。世論調査や投票結果に示される「グレイ」対「ブラウン」の対立軸は、操作された政治的フィクションであることを理解すべきである。

## （２）党大会の内実と接戦州の動向

前節ではスコッチボル&ウィリアムソンのいう「グレイ」対「ブラウン」という対抗軸が、アメリカ社会を分断している構図について検討した。しかし現実の選挙キャンペーンはこうした図式のように単純化されているわけではない。白人中間層の高齢者からなるティーパーティー運動は共和党予備選挙を通じて「ロムニー以外なら誰でもよい」「ストップロムニー運動」を掲げてきたし、逆に若者たちのオキュパイ運動も選挙ボイコットや第三政党待望論をアピールして必ずしも民主党支持を鮮明にはしてこなかった。また選挙戦略上共和党も懸命にヒスパニック・ラティーノ・アウトリーチに取り組むなど単純な構図からは説明不可能な事態も多発している。第二節では接戦州の動向および筆者が視察する機会を得た共和・民主の党大会についてその内実を検討する。

共和党大会は 2012 年 8 月 27 日から 30 日までフロリダ州タンパで開催された。ハリケーン・アイザックの直撃で大会初日は中止となり、街は市民が避難したためほぼ無人状態、警官隊とマスコミ・共和党代議員のみの異様な光景が展開されていた。また共和党の主力である南部諸州の代議員も地元の被災に対応するため大会を欠席せざるを得なかった。警官隊は 1 万 5000 人のプロテスターを予想していたがデモ参加者は、300 から 800 人に過ぎなかった。「ロムニーよ、お前こそが 1%だ!」というメッセージは説得力があったものの規模は必ずしも期待したほどではなかった。大会二日目は官公労との争議で有名になったウィスコンシン州知事スコットウォーカーや過激な反移民法で知られ



るアリゾナ州知事ジャン・ブリュワーがスピーチを行い、最後に女性票へのアウトリーチとしてアン・ロムニー夫人が演説した。

大会三日目にはマイノリティへのアウトリーチとしてコンドリーザ・ライス元務長官とニューメキシコ州のスザンヌ・マルチネス知事がスピーチし、最後にポール・ライアンが副大統領候補の指名を受託した。印象的だったのはマルチネスの赤裸々な政治遍歴である。「父も母も私も民主党員だったが、ある日私は本心では共和党を望んでいることに気づいた」という演説はラティーノ・リパブリカンが上下両院や州知事レベルでは増加しつつあるあまり知られていない事実を如実に示している。<sup>(14)</sup>

最終日には、クリントイーストウッドの一人芝居が上演された後、キューバ移民ながらティーパーティの有力メンバーでもあるマルコ・ルビオ上院議員(フロリダ)が演説し、「ヒスパニック・ラティーノ系に支持基盤を拡大しなければ共和党は永久に少数化することになる。」と自説を展開した。最後にロムニーが大統領候補指名受託演説を行い、1200 万人の雇用創出を確約して党大会を終えた。ハリケーン・アイザックの影響で散々な党大会だったが、スザンヌ・マルチネスやマルコ・ルビオのヒスパニック・ラティーノ・アウトリーチが強烈な印象を残した。<sup>(15)</sup>

次に民主党大会である。2012 年 9 月 3 日から 6 日までサウスカロライナ州シャーロットで大会は開催された。議長はロサンゼルス市長を二期務めているヒスパニック・ラティーノ系のビュアゴッサ氏である。シャーロットはバンクオブアメリカの総本山であり、全米第二位の金融都市でもあることから、大会前日は 800 から 2000 人のプロテスターが過激な抗議運動を展開した。彼らは「民主党もコーポレート・パーティに過ぎない」と喝破し、投票ボイコットあるいはグリーンパーティもしくはコンシューマーパーティへの投票を呼びかけていた。

大会初日はカロリーヌ・フェスティバルが開催され、バンク・オブ・アメリカ前の目抜き通りが歩行者天国となり、数多くのコンサートが街を盛り上げた。大会二日目は、基調報告(キーノート・アドレス)としてサン・アントニオ市長ジュリアン・カストロが登場した。<sup>(16)</sup>

30 代で人口 130 万都市の市長となったカストロはヒスパニック・ラティーノ系のホープであり将来はテキサス州知事を視野におき、テキサス州のブルースタート化を目指しているとの報道もある。



図表 1 「ロムニーよ、お前こそが 1%だ」  
タンパにて共和党大会への抗議行動に参加する筆者

テキサスはフロリダとともに例外的にヒスパニック・ラティーノ系の支持が民主共和で拮抗する傾向があり戦略的重要性が高い。また同日にはアフリカ系や働く女性へのメッセージとしてミシェル・オバマが情熱的な演説を行った。

大会3日目は、AFL-CIO(アメリカ労働総同盟・産別会議)のトラムカ会長、ナンシーペロシ下院内総務、マサチューセッツ州上院議員候補エリザベス・ウォレンのスピーチが続いた。サウスカロライナ州は労働権州(組合加入を拒否し労働する権利を州法で保障している州)であるために AFL-CIO はシャーロット大会には消極的でありトラムカの演説こそキャンセルしなかったものの組合主催のイベントは通常と異なりほとんどなかった。<sup>(17)</sup> また AFL-CIO が育成した 2004 年の副大統領候補エドワーズもサウスカロライナ州上院議員であったにもかかわらず、自分自身の訴訟が係争中であることから完全に無視されていた。<sup>(18)</sup>

他方、マサチューセッツ州上院議員選では、前回エドワード・ケネディ没後の補選をティーパーティーの支援するスコット・ブラウンに奪われるという衝撃的敗北を喫したため、今回は最重要候補としてハーバード大教授のリベラル派エリザベス・ウォレンを党大会でも重視した。最後にクリントン元大統領が、ロムニーとライアンを具体的な数字によって論駁しつつ洗練されたレトリックで聴衆の心を掴んだ。

最終日は、モンタナ州知事シュバイツァーが全国知事会でのロムニーのエピソードを披露し聴衆を盛り上げたものの、ジョンケリー、バイデン副大統領、オバマ大統領の演説は接戦州での保守層を意識したのか、安全保障が中心となった。退役軍人たちのセレモニーとともに、「GM は生き残り、ビンラーデンは死んだ」(バイデン)などと強い民主党を強調するメッセージが続き、多くの民主党員が期待する内容とは齟齬をきたしていた。

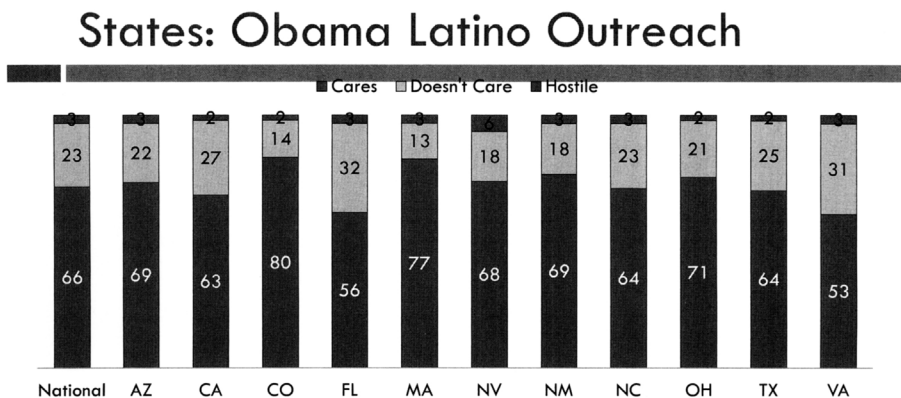


図表2 民主党大会ではオキュパイ・シャーロットも登場(筆者撮影)

共和党はヒスパニック・ラティーノ・アウトリーチを懸命に演出したものの功を奏さず、また民主党も労働権州、金融都市での開催が若者層や AFL-CIO の批判を浴びるなど意図に反し錯綜した党大会に終わった。結果的に共和・民主両党とも大会開催州を獲得することはできなかった。

次に接戦州の動向を検討する。大統領選終盤には民主共和両党とも本来の地盤を固め、民主党が 20 州の代議員 243 人、共和党が 24 州の代議員 206 人を確保していた。勝敗の行方はフロリダ 29、オハイオ 18、バージニア 13、ウィスコンシン 10、コロラド 9、アイオワ 6、ニューハンプシャー 4 の接戦州 89 議席にかかっていた。オバマ陣営からすればフロリダを確保すればそれだけで勝利、オハイオ+1 州でも勝利、フロリダ・オハイオ・バージニアをすべて落としても他の接戦州をすべて確保すれば勝利、と複数の方程式が用意されていた。他方ロムニー陣営はフロリダ・オハイオを決して落とすことはできずさらに奇跡を重ねなければ勝利はないという状況におかれていた。<sup>(19)</sup>

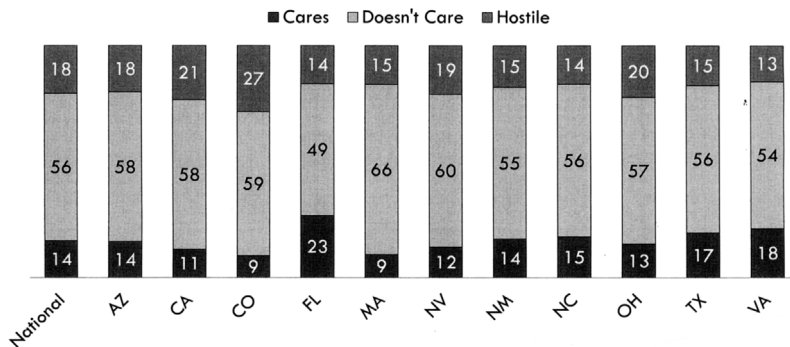
フロリダは 65 歳以上の人口が全米 1 の 17・3%、ヒスパニック・ラティーノ 22・5%と「グレイ」対「ブラウン」の構図が典型的のように錯覚するが、州南部は東部からリタイアした民主党支持の高齢者が多く、北部に共和党支持の退役軍人、またカストロを嫌ってアメリカへやってきたヒスパニック・ラティーノ系には共和党支持も多く、きわめて錯綜した状況にある。支持層分布の境界にあたるアイフォー・コリドーと呼ばれる国道 I-4 回廊周辺が勝敗の分岐点とされている。2012 年選挙ではマルコ・ルビオ上院議員らラティーノ・リパブリカンアウトリーチにもかかわらず有権者の 17% を占める彼らは 60% がオバマを支持しロムニー支持の 39% を大きく上回った。州全体の得票率をみても、50 対 49 の僅差ながらオバマが勝利した。<sup>(20)</sup>



図表 3

オバマのヒスパニック・ラティーノ・アウトリーチ  
(2012 ELECTION Eve Poll より)

## States: Romney Latino Outreach

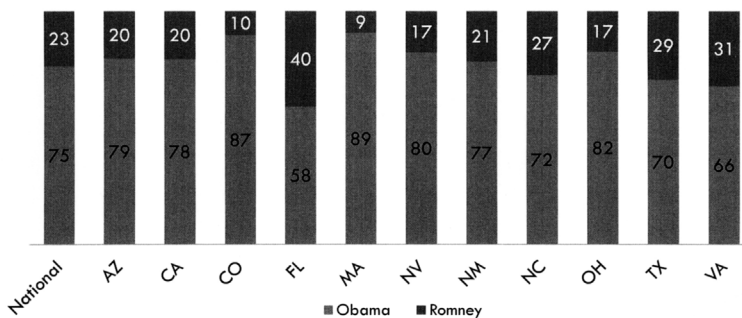


図表 4

ロムニーのヒスパニック・ラティーノ・アウトリーチ：州知事、議員レベルでの躍進とは対照的に有権者への浸透は限定的。

(2012 ELECTION Eve Poll より)

## Latino Vote for President by State



図表 5

ヒスパニック・ラティーノ系が有利な各州でのオバマ対ロムニーの支持率比較 (2012 ELECTION Eve Poll より)

オハイオは、1964 年以来勝利した候補者が必ず大統領となっており、とりわけ共和党は結党以来過去にオハイオを落として当選した大統領はいない。他方、ヒスパニック・ラティーノ系は有権者の 3% を占めるにとどまっており、今回も 52 対 42 でオバマ支持が上回ったものの、むしろ自動車産業の救済やシェールガスの成功が雇用を生み出したことが現職有利に働いた。失業率は全米平均 7・8% に対して 7% と幾分安定している。選挙結果も 50 対 48 で僅差ながらオバマが勝利した。

バージニアは、1968 年から 2004 年まで一貫して保守の牙城だったが、インド系 11 万人、韓国系

8 万人、ベトナム系 6 万人、などアジア系住民の増加が接戦をもたらしている。今回の選挙では有権者の 70% を占める白人はオバマ 37 対ロムニー 61 だったが、有権者の 20% を占めるアフリカ系はオバマ 93 対ロムニー 6、有権者の 5% を占めるヒスパニック・ラティーノ系はオバマ 64 対ロムニー 33、有権者の 3% を占めるアジア系はオバマ 66 対ロムニー 32 という結果に終わった。全体の得票も 51 対 48 の僅差ながらオバマが勝利した。

その他の接戦州についても、ウィスコンシンが 53 対 46、コロラドが 51 対 47、アイオワが 52 対 46、ニューハンプシャーが 52 対 47 といずれもオバマの勝利に終わった。

## 結びにかえて

アメリカ社会は再び、世代・所得・エスニシティにより分断され、「グレイ対ブラウン」の対立軸を形成しているのだろうか。ティーパーティーの草の根アクティビストが白人・中間層・高齢者といった社会的属性を持つのに対し、ウォール街占拠運動に象徴される潮流は、若者や多様なエスニシティから構成されており、経済的にも雑多な社会的属性から成り立っている。第一章では具体的経緯に即してウォール街占拠運動の展開と全米への広がり、ティーパーティーの起源と類型、ティーパーティーと労働運動が激突したウィスコンシン争議について検討した。コーポレートリッチの支援を受けたアドボカシー・グループや保守系メディアが官公労働者や公立学校教職員を「税金にたかる第一の敵」とステレオタイプ化し草の根保守を動員するという構図は、グレイ対ブラウンの対立にもみえる。しかしウィスコンシンのように共和・民主の対決とグレイ対ブラウンという図式が重なり合う事例はむしろ稀である。フロリダのように東部からリタイアした民主党支持の高齢者と、カストロを嫌いキューバから亡命してきた共和党支持のヒスパニック・ラティーノが選挙戦を競い合う地域もある。第二章で指摘したように、共和党大会ではマルコ・ルビオやスザンヌ・マルチネスのように議員や州知事レベルでリパブリカン・ラティーノは急増し、結果に結びついてはいないものの懸命のアウトリーチが展開されている。逆にオキュパイ運動の若者たちは、「民主党もコーポレート・パーティーに過ぎない」と喝破し、選挙ボイコットや第三政党待望論を主張している。

2012 年の選挙結果をみても、オバマの勝利は接戦州における選挙戦略の巧みさによるものであることは明白で、4 年前とは違い、若者やマイノリティも最悪の事態を回避するために消極的選択肢を選んだに過ぎない。下院の議席は共和党が 234 議席と 8 議席減らしはしたものの民主党の 201 議席を大きく上回っている。分割政府の状態のままアメリカ政治の機能不全は解消されてはいない。財政の壁をめぐる両党の論争が減税打ち切りの対象者は年収 25 万ドル以上か、40 万ドル以上かで紛糾しているようにもはや旧態依然たる妥協と駆け引きは何の問題解決にもなっていない。成長を阻害しない新たな再分配の方法、若者世代に向けた財政規律と矛盾しない社会政策、こうした政策イノベーション

ョンが実現されない限り、民主党の大統領や民主党多数議会が誕生したところで何も変わらないだろう。「グレイ対ブラウン」の対立が提起しているものは、人口構成の変化や社会変容に対応した政策刷新である。古色蒼然たるゲームのもとでの多数派形成にとらわれていては、アメリカ政治の再生は望めないだろう。

## 注

- (1) ウォール街選挙運動の内実については、当事者でもある批評家の高祖岩三郎氏から詳細を伺った。(2012 年 8 月 20 日、社会運動ユニオニズム研究会、「直接行動で世界を変える①ウォール街占拠運動の展開と現在」)
- (2) ウォール街占拠運動の具体的展開については、一橋大学フェアレーバー研究所高須裕彦氏の調査資料に依拠した。(2012 年 2 月 4 日、社会運動ユニオニズム研究会配布資料)
- (3) ゼネラル・アセンブリー、スポーク・カウンシルについてはアメリカの社会運動に詳しいマット・ノイズ氏の示唆を受けた。(2012 年 6 月 9 日、社会運動ユニオニズム研究会による模擬演習および配布資料)
- (4) 2010 年の米国中間選挙については、高橋善隆 2011「米国政治における分割政府時代の中間選挙」『跡見学園人文学フォーラム』第 9 号を参照.)
- (5) ティーパーティーに関する近年の研究書としては、Skocpol.T&Williamson.V(2012)  
*The Tea Party and the Remaking of Republican Conservatism*. Oxford University Press.NewYork. を参照.
- (6) ティーパーティーの類型については Institute for Research&Education on HumanRight,eds, *Tea Party Nationalism:A Critical Examination of the Tea Party Movement and the Size and Focus of its National Factions*,Aug.24.2010.に依拠した。(『ティーパーティ運動』藤本一美、末次俊之 (2012) 東信堂. に抄訳が所収)
- (7) ウィスコンシン争議の具体的経緯については、ウィスコンシン大学でティーチング・アシスタントを務め、当事者でもあるエイドリアン・パジック氏から示唆を受けた。(2012 年 9 月 18 日、社会運動ユニオニズム研究会)
- (8) ティーパーティーが、狭義の社会運動でなく、草の根保守アクティビスト、保守系メディア、コーポレート・リッチから支援されたアドヴォカシー・グループの複合体であることは、スコッチボル&ウィリアムソンが指摘している。Skocpol&Williamson(2012) p. 156
- (9) 高須裕彦 (2011)「抵抗を掲げるアメリカ労働運動—共和党右派・茶会からの攻撃に対して」『現代の理論』2011 年春号を参照.
- (10) Skocpol&Williamson(2012)p.204
- (11) 米国国勢調査(センサス)2010 に依拠したヒスパニック・ラティーノ系人口の増加と、草の根保守からのバックラッシュについては、高橋善隆(2012)「交錯する 2 つの潮流 —アメリカ政治における人口構成の変化とバックラッシュ—」『跡見学園女子大学文学部紀要』第 47 号を参照.
- (12) Skocpol&Williamson(2012)pp.197-198
- (13) Ibid.pp200-201
- (14) ニューメキシコ州知事スザンヌ・マルチネスの経歴・スピーチについては  
Naureen Khan“GOP Hopes Martinez Can Be Latina Trailblazer”

*National Journal Convention Daily*, August 29, 2012 Tampa Republican National Convention. を参照.

- (15) フロリダ州上院議員マルコ・ルビオの経歴とスピーチについては、

William March “Is there Sunshine in GOP future?” *The Tampa Tribune*, August 31, 2012. を参照.

- (16) サンアントニオ市長ジュリアン・カストロの経歴とスピーチについては、

Shane Goldmacher, “In Castro, Dems Have Keynote With Echoes of Obama” *National Journal Convention Daily*, Charlotte Democratic Convention, September 4, 2012. を参照.

- (17) AFL-CIO の民主党シャーロット大会に対する姿勢については、Rovin Bravender, “Unions shrug at DNC in State of N.C.” *The Charlotte Observer*, September 2, 2012. を参照.

- (18) ジョン・エドワーズをめぐる民主党や地元サウスカロライナ州の事情については、

Rob Christensen, “Looking for John Edward? Don’t bother,” *The Charlotte Observer*, September 5, 2012. を参照.

- (19) 各州の動向・分析については *CQWEEKLY*, 2012 Democratic Convention Guide With State-by-State Election Outlooks, September 3, 2012. など多くの資料を参考にした.

また選挙結果については CNN の ELECTION CENTER に依拠した.

<http://www.cnn.com/election/2012/>

- (20) ヒスパニック・ラティーノ系へのアウトリーチについては、

2012 Election Eve Poll, に依拠した.

<http://www.latinodecision.com/2012-election-eve-polls/>